



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「書きなしなめり」考：『和泉式部日記』跋文の解釈と”前提的基層
Author(s)	岡田，貴憲
Citation	国語国文研究，143，18-32
Issue Date	2013-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93186
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_143_18-32.pdf



「書きなしなめり」考

——『和泉式部日記』跋文の解釈と「前提的基層」——

岡 田 貴 憲

一 はじめに

宮のうへ御ふみかき・女御とのゝ御ことは、さしもあらし、かき⁽¹⁾なしなめり、と本に。
(三条西家本／五六才)

『和泉式部日記(物語)』の作品世界は、北の方が帥宮邸を自主的に退去するという異例の事件が語られた所で突然の幕切れを迎える。その直後に置かれる右の跋文については、一文の解釈自体には何の疑いも挟まれることがなく、これまで主に作品論との関わりから様々に論じられてきた。

しかし、そこには見過ごすことのできない瑕疵があったのではないか。つまり、名詞「かきなし」の語義に対する従来諸注の解釈は誤りであり、その解釈を前提とした周辺論考も、必ずしも正確ではなかったとみられるのである。本稿ではこうした観点から、動詞「書きなす」の語義の用例に照らした修正を端緒とし、『和泉式部日記』

の跋文に対する諸注の解釈が抱える不備を指摘した上で、その跋文がいかなる機能をもって作品の内外に働きかけてゆくのかを、『和泉式部日記』と『栄花物語』の両作品に共通する「前提的基層」との関係を踏まえて考察する。

二 問題の所在

手順として、跋文の傍線部「かきなしなめり」に対する『新註』⁽²⁾以後の諸注の解釈を確認しておく、以下の通りである。⁽³⁾

○多分作者が推量で書いたものだらう (『新註』現代語訳)

○「かきなし」は名詞。書きなしであるやうだ、作り書きのやうだの意。物語的に潤色したもののやうだといふのである。

○(作者の)作りがきのようである (『考注』語釋)
○(作者の)作りがきのようである (『大系』頭注)

○作者が、かういふやうに書いたものであらう。 (『全書』頭註)

○作者の作意によるものと見える (『全講』通釈)

○「書きなし」は名詞。書きなしたものの。作り書き。作者の作意によつて書かれたもの。 (『全集』頭注)

○作者の作為のようである。即ち、北の方の手紙や女御殿の御ことばは、以上書いたようなものではあるまい。作者の作り書きのようであるというのである。 (『対校新釈』語釈)

○「書きなし」は、作者が推量で然るべく書くこと。

(『鑑賞』脚注)

○この日記の作者が適当に書いたのである。

(『講談社文庫』脚注)

○(作者が) こう書いたのだろう

(『学術文庫』現代語訳)

○作者が勝手に書いたのだろう

(『集成』頭注)

○わざわざの作り書きであるようです。

(『譯注と評論』訳文)

○それらしくわざと書いたものでしょう (『日本の文学』口語訳)

(『全集』語釈)

○「物のたまはず」までを指して、創作して書いたもののように、

の意。「かきなし」は、作り書き。創作。

○「書きなし」は名詞。書きなしたものの。作り書き。作者の作意によつて書かれたものらしい、の意。

(『新全集』頭注)

○宮の北の方の手紙と姉女御からの手紙の文面はこのようなものではなかったらう。書きなしたものであらうという但し書がつく。

(『全注釈』注解)

○それらしく作り書きしたようである (『ソフィア文庫』現代語訳)

『新註』『鑑賞』が「推量」、『全釈』が「創作」の語を用いている

ほか、多くが「作意」「作り書き」と訳しており、その他の注釈書も表現こそ異なるが解釈の基本線はいずれも一致しているとみてよい。すなわち、「かきなし」を「(作者の想像による) 創作」とし、跋文全体を「帥宮の北の方と女御殿が交わした手紙の内容は、いずれも作者による全くの創作であらう」のように解釈するのである。さて冒頭で述べたように、「和泉式部日記」の跋文をめぐるのは、これまで主に作品論との関わりから多様な論が展開されてきた。鈴木一雄が『全講』の鑑賞欄に、

(上略) 散文終焉部にいたつて、『日記』の超越的視点は拡大されはじめた。『日記』は、じつはここから「物語」的になったのである。登場人物が増した。それまで「影の人」であつた北の方がクロージアップされ、東宮の女御も登場した。この人々まで経験性をもつて書いてみたのである。当然、作意がつよくなる。この点を前記の注記が指摘しているのである。(中略)もし、末尾の注記が、作者その人の技巧なら、あたらしい人物たちの登場、つまり「宮の上御文書き、女御殿の御ことば」という新しい超越的視点を苦しんだ作意の反映が、「さしもあらじ」「書きなしなめり」として、裏返しのかたちで示されていることにならう。また、もし、後人の注記とするならば、女の宮邸入り後の筆致の変更とその困難をめぐにつかんだ人の批判として納得できるのではあるまいか。

と言ひ、あるいは三田村雅子が『日本の文学』の解説で、和泉式部の宮邸入りに大きく体面を傷つけられた北の方とその東宮妃臈子の緊迫した手紙のやりとりを描くこの部分は「事実」

ではなく、「書きなし」らしいと筆者は弁明するが、と言うことはすなわち、女の宮邸入りがこのような社会的広がりを持つ波乱を巻き起こす以前の、歌を主体とした部分は「書きなし」などではない事実だということを逆に宣言するものともいえよう。

と述べたのがその類であり、こうした説は広く認知されて現在に至っている。これらはいずれも右に示した「かきなし」創作という解釈を踏まえており、「宮の上御ふみかき・女御との御ことは」のみが虚構であり、その他の部分は全て事実に基づいている、との前提に立脚している。

だが私見によれば、そもそも名詞「かきなし」に「創作」という語義を認めることはできず、これらの論はその前提に欠陥を抱えていると思しいのである。まずはこの点についての検討を行う。

三 「書きなす」の語義

名詞「かきなし」の語義は動詞「書きなす」のそれに従うと考えられるが、いま「書きなす」について試みに二三の辞書を繙くと、
○ことさらに…と見えるように書く。わざと…のように書ききたる。(角川古語大辞典)

○意識して…のさまに書く。わざと…のように書く。(小学館古語大辞典)

○(意識して)…のように書く。(岩波古語辞典)

のように記述されている。補助動詞「なす」の語義が「意識して…

する」であることを考えれば、「書きなす」とは書き手が意識的に何かを書く場合に用いられる語ということになるが、その書き手の「意識」はこれまで「創作意識」のごとくに解されてきた。例えば次に掲げる『枕草子』の一文は、物語作者の創作時の姿勢を批評したものと解されるのが通説となっている⁽¹⁾。

【例1】

物語などこそあしう書きなしつれば、言ふかひなく、作り人さへいとほしけれ。

『枕草子』一八六段「ふと心おとりとかするものは」／三二五頁
つまり、「あしう書きなしつれば」を「悪く書き作してしまう」と(新全集・現代語訳)のように解し、その主体を「作り人」と同一人物とみなすのである。

しかしこの通説に対して、片岡利博による異論が提出されている。片岡の論「狭衣物語研究から見た源氏物語」⁽⁵⁾は、「(物語を)書く」という表現は、書写することをいうのが一般的であって、物語を創作することは「(物語を)作る」というようである」ことを理由に通説を否定するとともに、「書きなし」を書写者による「意識的な改変」と解し、右の一文を次のように現代語にパラフレーズする。

物語などを書写する場合、もとの本文を書き変えて品のない言葉遣いをしてしまうと、とたんにその物語自体がつまらないものになって、原作者までが気の毒な結果になってしまう。

この新見の前提には、右の一文が本来は能因本・前田本のように「男も女もよろづのことよりもまさりてわるきものは」の段に含まれていたとの想定がある。これらの本では、一文の下に「なをすちや

うほんのまゝ、などかきつくる、いとくちをし」との文が続いているが、この難解な文を片岡論文では「かといつて、やはり、書写されたテキストに「本のまま」などと書き付けてあったりするのは、いかにも芸がなくて、物足りなく思われることだ」と解釈している。ここで述べられているのが、物語を忠実に書写することしかできない愚直な書写者への苦言であつてみれば、先の「書きなし」も書写者の営為と捉えるのが妥当との理屈が働く。

いまこの新見を、問題とする『和泉式部日記』跋文の「かきなし」へ敷衍すると、従来の諸注が示してきた解釈はいずれも否定されることになるが、片岡論文の示す根拠のみでは不足の感もある。片岡論文の解釈と辞書的語義との間に径庭が認められる以上、語義理解の修正には用例に照らしての検討が不可欠とならう。

筆者の調査によれば、平安期の散文における動詞「書きなす」の用例は右例を含めて少なくとも十四例あり、その用法には複数のパターンが存在することが知られる。第一の用法は文字の筆跡・絵面の筆遣いに関わるもので、次のような例である。

【例2】

例の小さくて、

「いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ
同じ人にや」とことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうを
かしげなれば、やがて御手本に、と人々聞こゆ。

（『源氏物語』若紫巻／①・二三八頁）

病臥する北山の尼君のもとに光源氏から見舞いの手紙が届く。その中には、「ことさら幼く書きなし」である若紫宛の手紙が、小さく

引き結ばれて同封されていた。それを見た女房達が「やがて御手本に」と言うのであるから、「ことさら幼く書きなしたまへる」とは文面への言及ではありえず、源氏の手紙が意識的に子供のような筆跡で書かれていたことを指すと考えねばならない。つまりこの「書きなす」は「意識して……筆跡で書く」と解釈されることになる。

【例3】

あり、『源氏物語』には右例の他に三例ある。

【例4】

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしかりけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

（『源氏物語』螢巻／③・二〇四頁）

やがて御覧すれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただ片かどに、いといたう筆澄みたる気色ありて、書きなしたまへり。歌もことさらめき、側みたる古言どもを選びて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。

（『源氏物語』梅枝巻／③・四一九頁）

【例5】

葦手の草子どもぞ、心々にはかなうをかしき。宰相中将のは、水の勢ひゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたる
ところあり。

（『源氏物語』梅枝巻／③・四二〇～二〇一頁）

【例3】は玉鬘宛に届いた螢兵部卿宮からの手紙に対する語り手の評。「御手は」とあることから、筆跡への言及であることは疑いなく、

この「書きなしたまへり」は、螢兵部卿宮の筆跡が意識的に情趣あるように書かれていたことを指す。【例4】は螢兵部卿宮が光源氏からの依頼を受けて作成・持参した草子に対する評で、ここでも「御手」とあるから、螢兵部卿宮の筆跡が意識的に「筆澄みたる気色（『垢抜けた感じ』）で書かれていたことを指すとみられる。【例5】は夕霧が持参した草子に対する評で、同例は「御手」への言及を欠くものの、夕霧の草子に書かれているのは「水の勢ひ」や「そそけたる草の生ひざま」などの絵であるから、ここの「書きなし」も夕霧の見事な筆遣いを指すことは動かないだろう。

また、『狭衣物語』に二例、『夜の寝覚』『栄花物語』に各一例、同種の「書きなす」がみられる。

【例6】

御几帳のそばにひき隠して、書きたまふ。心苦しげなりつる御けはひの、なべてならず身に添ひたる心地すれば、垣根に生ふるとも言はれぬべきを、なほつましみのわりなく、書きもやられたまはず。さりとて、これをさへやと、ひとやりならず嘆く嘆く、あらぬさまにぞ書きなしたまふ。

うたたねのなかなか夢と思はば覺めてあはする人もありやと
と
（『狭衣物語』巻二／①・一八〇頁）

【例7】

中将、扇に、秋の野を描きて、風いたう吹きたるに、本あらの萩に露重げなる、しがらみかくるさ牡鹿のけしきを、をかしく描きないたるを見たまひて、「呉苑の秋の風は月満つこと頻りなり」と書きたまへるはさ間に、小さくて、

我が方になびけよ秋の野の尾花心を寄する風はなくとも

（『狭衣物語』巻三／②・一六八頁）

【例8】

うち返しうち返し見たまひて、「宮は、『さかしく起き居て、筆うちつくるひてぞ書き出でつらむ』とぞ、御覧じつべかめる。すこしは、かたほに書きなしたまはで」と、うちほほゑみて、御使ひに、女房杯取りなどして、物被けらるる、例のこと。

（『夜の寝覚』巻五／五二七・五二八頁）

【例9】

姫君いと恥づかしと思したれど、なほ御手づからと思いて、北の方せちにそそのかしきこえたまひければ、わりなければ書きたまへるを、大殿御覧するに、いとど中納言の御手を若う書きなしたまへると見えて、えもいはずあはれに御覧ぜらる。

（『栄花物語』巻十四「あさみどり」／②・一五〇頁）

【例6】は女二宮への密通を果たした狭衣が後朝の手紙を書く場面。人目を憚る関係のため、手紙の書き手が狭衣であると露顯することは避けねばならず、その結果「あらぬさまに書きなしたまふ」との行為に至る。よってここの「書きなし」は、狭衣がわざと他人

の筆跡のように手紙を書いているさまを指すと解される。【例7】は、宮の中將の妹君に対する思ひの丈を狭衣と中將が互いに述べ合う場面。中將の扇に「をかしく描きな」された秋の野の情景に触発された狭衣が、さらに美しい筆跡で和歌を書き加えたというのであり、ここの「描きないたる」とは、秋の野の情景が中將の入念な筆遣いによつて描かれていることを指していると考えられる。【例8】は、

七日の産養に中宮から見舞の品や手紙を受け取った寢覚上が、中宮への返歌を自らしたためる様子を、右大臣が鑑賞する場面。寢覚上の返歌が臥しながら書いたとは思えない程見事であるのに対し、右大臣は「すこしは、かたほに書きなしたまはで」と冗談交じりで忠告する。この「書きなし」は、文脈から考えて寢覚上の見事な筆跡に対する言及と解さなければならぬ。そして【例9】は、後朝の手紙を受け取った藤原行成女から藤原長家のもとに届いた返歌を、長家の父道長が見る場面。道長は行成女の手紙をみて、書の名手である中納言（行成）の「御手」を若々しく「書きなし」であることに感嘆する。ならばこの「書きなし」は、行成女が父譲りの巧みな筆跡を意識して書いたことを指すとみるべきである。

以上「書きなす」の第一の用法は、いずれも文字や絵画等の見た目に対する言及であり、内容面には一切関与しないものである。続いて取り上げる第二の用法は、書かれている事柄の言葉遣いや体裁といった形式面に触れる「書きなす」の例である。

【例10】

御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

「ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや

ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。
あなかしこ」とるやゐやしく書きなしたまへり。

（『源氏物語』真木柱巻／③・三九二頁）

髭黒によって六条院からの退出を余儀なくされた玉鬘は、髭黒の

留守中に光源氏からの恨み言を連ねた手紙を受け取る。右例は、それに対する返事として玉鬘のしたためた手紙であり、その文面は「ゐやゐやしく書きなし」であったという。玉鬘は髭黒の妻である以上、光源氏への屈折した愛情を抱きながらも、表面上はあくまでも父娘として交際せざるを得ず、文面も「あなかしこ」と結ばれる定型なものに留めなければならぬ。「ゐやゐやしく書きなしたまへり」とは、「意識して丁寧な筆跡で書いた」と解することもできそうだが、ここではわざと型どりの文章に終始した手紙の様子を表す言葉として、形式面に向けられた評であると考えるべきであろう。

【例11】

この用法に該当する例は少なく、右例のほか『蜻蛉日記』に一例を数えるのみである。

さて其日になりて、文あり。いとかへりごと、うちとけしにくげなるさましたり。うちのことばは、「月ごろはおもひ給ふることありて、殿につたへ申させはべりしかば、「こののさまばかりきこしめしつ。いまはやがてきこえさせよとなん、おほせ給」とうけ給はりにしかど、いとおほけなき心のはべりけるとおぼしとがめさせ給はんを、つゝみはべりつるになん。ついでなくてさへおもひ給へしに、司召み給へしになん、この助の君のかうおはしませば、まいりはべらんこと、人みとがむまじう思たまふるに」など、いとあるべかしうかきなし、端に、「武蔵といひはべる人の御曹司に、いかでさぶらはん」とあり。

（『蜻蛉日記』下巻／大系・二九九頁）⁽⁶⁾

右例は、道綱母の養女のもとに届いた藤原遠度からの求婚の手紙

である。ここでは、速度からの手紙がまさに求婚のそれに「あるべきしう」、つまりふさわしく「書きなし」であったという。この「書きなし」も前例と同様、書かれている事柄の形式面に向けられた言葉とみてよいだろう。

さて、ここまで動詞「書きなす」の二用法として、形態に関わる用法と形式面に関わる用法とを確認した。ところが「書きなす」の用例には、もう一つの用法に分類されるべき諸例が存在するのである。

【例12】

春の歌、花の心など、さいふいふも、上臈二つ三つばかり書き
て、「これに」とあるに、

年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひ
もなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じくらべ
て（下略）（『枕草子』二二段「清涼殿の丑寅の隅の」／五二頁）

【例13】

数知らぬこともを聞こえ尽くしたれど、うるさしや。ひが事
どもに書きなしたれば、いとどをこにかたくなしき入道の心ば
へもあらはれぬべかめり。

（『源氏物語』明石巻／②・二四七頁）

【例14】

七月七日の御ぞのこと申したるふみに、かさにわづらひて
きぬをえきさぶらはぬ、とかきたるふみのもじどもを、さ
ながらかきなしてやる

けふなれどあまのはごろもきられねばわたりわづらふかさき
のはし

返し、ためなか

かさきのはしのいたまにとだえてたちいできぬぞからこ
ろもなる
（『四条宮下野集』／五七・五八番）

【例12】は、女房達が中宮に命じられて、白い色紙に古歌を一人一首ずつ書いてゆく場面。他の女房が春や花を詠んだ古歌を書き付ける中で、清少納言は「年経れば」歌の第四句「花をし見れば」を「君をし見れば」と「書きなし」たことで、その機転を中宮から賞賛されたという。【例13】は、光源氏を自邸に迎え入れた明石入道が、四月のある晩に源氏と音楽談義を交わす中で娘の将来に対する苦労話を打ち明け、源氏の意向を探ろうとする場面の草子地。入道は娘について数多くのことを言い尽くしたが、その一部は省略してあり、また書かれた部分についても事実とは異なるように「書きなし」てあるという。最後の【例14】は四条宮下野と橘為仲との贈答。下野の「けふなれど」歌は「はごろも」「きられねば」「わづらふ」「かさ」の語を含んでいるが、これは為仲が寄越した手紙「かさにわづらひてきぬをえきさぶらはぬ」の言葉を利用して作られている。そのことを詞書では「さながらかきなして」と述べる。

筆跡への言及でもなく、内容の形式面に触れるでもない右の三例。これらの「書きなす」に合理的な訳を求めるならば、それは「書き変える」より他にはないのではないか。【例12】では、「花をし見れば」を「君をし見れば」と「書き変えた」ことになり、【例14】では「かさにわづらひてきぬをえきさぶらはぬ」という手紙の言葉を利用し

て、そのまま歌の形に「書き変えた」と読むのが正解であろう。そして【例13】。改めて言うまでもないことだが、『源氏物語』は作中の場面を直接見聞した古女房によつて語られるという体裁をとる。この草子地について言えば、入道の話の一部を「うるさしや」と省略し、残りの部分を「ひが事ども」に「書きなし」たのも、実際に入道と源氏のやりとりを見聞した古女房ということになる。この古女房は入道の話を直接見聞していながら、その内容を事実とは異なるように「わざと書き変えた」というのである。

つまりこの三例は、【例1】に対して片岡論文が示した新見と同様、「書き変え」を表す「書きなす」の用法と考えられるのである。

動詞「書きなす」の基本的な語義は、前掲の各辞書が示す「意識して…のように書く」で問題ないと考えられるが、その用例には三通りの用法が認められることがこまごまの検討により明らかになった。第一は「意識して…な筆跡で書く」、第二は「意識して…と形式的に書く」、そして第三は「意識して…と書き変える」である。少なくとも平安期の用例に照らしてこれに例外はなく、この結果を名詞「かきなし」に敷衍すれば、「(作者の想像による)創作」という語義は認められないことになる。では、『和泉式部日記』跋文の「かきなしなめり」はどのように理解されるべきだろうか。

そもそも、この跋文で「さしもあらじ」と批判されているのは「宮のうへ御ふみかき・女御との、御ことは」であり、それは手紙の内容に対する疑問の提起であるから、第一の「意識して…な筆跡で書く」という用法をここに認めることはできない。よつて正解は自ずと第二もしくは第三の用法に絞られるわけだが、いずれが正解であ

るにせよ、すでに解釈の方向は定まっているのである。なぜならば、仮に第二の用法が該当するとしても、一文の解釈は「くだけた文面で書かれていた実際の手紙を作者が」わざと形式的な文面に書き変えたのだろう」となり、結果としては、「(実際の手紙を作者が)わざと書き変えたのだろう」となる第三の用法と重なる解釈が導かれるのである。そして、その文面が形式的であるか否かは個々の読みの問題に属する。

以上を踏まえ、跋文全体の解釈を示すと次のようになる。

帥宮の北の方によるお手紙の書き様・女御殿のお言葉は、このようなものではあるまい、(作者による)意図的な書き変えてであらう、と本にある。

四 「書きなしなめり」と『前提的基層』

「かきなし」が作者の単なる想像による「創作」ではなく、現実の出来事に基づく「意図的な書き変え」を意味するならば、問題の一文は『和泉式部日記』跋文としてどのように読まれるべきなのだろうか。

あらかじめ明確にしておきたいのは、本稿はこの跋文について成立論との関わりから論じる立場には与しないということである。次に掲げる『大系』補注は、この跋文がかつて『和泉式部日記』の書写過程を探る資料の一つとして用いられていたことを端的に整理したものである。

「…と本に」という形式は、たとえば、枕草子などにも「それ

よりありきそめたるなめりとぞほんに」(三巻本)とある。「もとの本に書いてあるぞ」という注記で、奥書に「本云…」とある類である。寛元本の奥書など、その例にあたる。そうすると、

「宮の上御文がき…書きなしなめり」は、その「本云」のあとにある文となるから、現存の和泉式部日記は、少なくとも第三次の写本ということになろう。第一次は、「…とてもものたまはず」で終っているもの。第二次は、その本文に「宮の上御文がき…書きなしなめり」を書き加えたもの。第三次は、それを写したものである。もつとも、右の注記は、すでに第一次の原本にあった、とする考え方も成り立つ。ちょうど土左日記に見られたような「女もしてみむとてするなり」、作者の技巧とする考え方である。この考え方は、日記の作者を式部とみようとすると人に、多少の支持を与えるであらう。(それとても、第三者作者の作為と考えられないこともないから、問題は残るが。)

ここで述べられているのは、跋文の内容を真実とみるか否かで原本からの三転書写の有無が左右されるということだが、この跋文は現存する四系統の写本すべてに存しており、それらの系統が発生する以前に三転書写が行われたと考えるのは現実的でないことから、これを作者の偽装とみるのが「考注」以降一般化している。とはいえ現状では外部徴証が存在しない以上、両説に決着を付けることは不可能である。よつていまは「求められるのは、プロパー本文と看ぬのであればきつぱりと斬り棄てて何も論じぬ際やかな態度か、プロパー本文と見てそれをしかるべく定位しようとする揺るぎない勤い態度か、そのいずれかであらう」との金井利浩の提言に従い、この

跋文が所与の本文であるとの前提に立つ。

このことを確認した上で、改めて問題の跋文を読み解いてみると、この跋文は東宮女御による、

「いかにも、このころの人のいふことはまことか。我さへ人けなくんおほゆる。夜のまにもわたらせ給へかし」

との手紙と、それに対する北の方の

(三条西家本/五四〇)

「うけ給はりぬ。いつも思さまにもあらぬ世のなの、このころはみくるしきことさへ待てなん。あからさまにもまいりて、宮たちをもみたてまつり、心もなくさめ侍らんと思給ふる。むかへに給はせよ。これよりも、みくにもきゝいれ侍らしと思給て」

(同五四ウ)

との返事を、跋文の書き手が「このようなものではあるまい、(作者による)意図的な書き変えであらう」と推測していることを語っている。二人のやり取りした手紙が執筆上の素材として実在したか否かとは別に、この跋文の書き手、そしてこの跋文を目にする読者は、この記述の背後に現実の手紙の存在を推測しており、その手紙は作中に書かれたような内容ではなかったと考えているのである。

二人の手紙の内容に目を向けると、東宮女御の手紙は、帥宮から疎略な扱いを受けている北の方への同情、実家への帰郷の勧誘であり、北の方の手紙は帥宮との結婚生活に対する不満の訴え、そして帰郷の準備依頼である。この一見ありきたりな文面を指して、なぜ跋文の書き手は「意図的な書き変えであらう」と言うのだろうか。

ここで参照したいのが、『栄花物語』「はつはな」巻の記事である。

小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、ともかうもなさでうせたまひにしかば、いかで女御殿に劣らぬさまのことをなど思しかまへて、東宮の御弟の帥宮に聞えつたまへりしかば、南院に迎へたまへりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなりもていき、和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をばことのほかに思したりしかば、居わづらひて、小一条の祖母北の方の御もとに帰りたまひにしぞかし。されば東宮も、宣耀殿も、「このことをわが口入れたらましかばいかに聞きにくからまし。知らぬことなれば、心やすし」とぞ思ひのたまはせける。御幸ひ同じはらからと見えたまはず。和泉をば、故彈正宮もいみじきものに思ほしたりしかば、かく帥宮もうけとり思すなりけり。『榮花物語』巻第八「はつはな」①・四五五頁

右の記事によれば、中の君（帥宮北の方）の帥宮邸退去の報を耳にした宣耀殿（東宮女御）は、東宮とともに「関知しないことだから氣楽だ」と傍觀を賣いていたという。北の方の結婚生活を心配し、自ら帰邸まで勧めていた東宮女御の姿はここにはない。

両作品間で東宮女御の態度にこのような温度差があることは早くから注目されており、これまでに大倉比呂志『和泉式部日記』巻末注記に関する一覽書^②、坂本信道『和泉式部日記』成立の背景^③、妹尾好信『和泉式部日記』の成立に関する試論——その執筆契機と赤染衛門の関与について——^④といった諸論においてその背景の解明が試みられてきた。作品終末部の記事における北の方への好意的な描写の理由を「式部は北の方を正妻として一目置いていた」ことに求める大倉論文は、「式部は自己保全を確立すると同時に、北

の方の体面をも保ち得るように〈小物語〉を創作したのではなからうか」と述べ、その創作によって生じた『榮花物語』とは異なつた北の方の取り扱い^⑤に対する注記として問題の跋文が書かれたとする。坂本論文は大倉論文と同様に北の方への配慮を認めつつ、それは『和泉式部日記』の執筆に際し「敦道親王の協力があつたためになされた北の方への配慮」である^⑥と言ひ、問題の跋文についても、「高貴な人物の身の上を語り、それを公開する場合」の通例に照らし、作品公開時に親王周辺への失礼がないように書かれたものとして説明する。妹尾論文は、「赤染衛門の勧めを受けて、中宮彰子へ出仕するための就職運動の一環として和泉式部によって書かれたもの」が『和泉式部日記』であり、その第一読者かつ『榮花物語』の著作者であつた赤染衛門が、自らの理解とは相違する内容への感想として書き付けたのが、問題の跋文であると述べる。

これらはいずれも興味深い論考ながら、問題点がないわけではない。一つは言うまでもなく「かきなし」の語義理解における誤りである。坂本論文は立場を明確にしないが、大倉論文が「創作」の語を用いており、妹尾論文も「作者の作り書きのようだ」との訳を充てており従えない。またいずれの論にも、『和泉式部日記』は和泉式部の自作であるとの認識が前提にあり、表現上の問題が作者の問題と区別されていない点、本稿の立場と相容れない。そこで本稿では、これらの論とは別の角度から問題の跋文がもつ機能を探つてみたい。その土台となるのが、藤岡忠美「和泉式部日記の前提的基層と創作性について」^⑦の主張する「前提的基層」である。

「ゆめよりもはかなき世のなか」と書き起こされ、「故宮にさふら

ひしことねりわらは」の登場、その童と女との「とをさかるむかし
のなこりにもおもふを」「御かはりにもみたてまつらん」とてなん、
そちの宮にまいりてさふらふ」という対話、そして「おなしこゑ」
「おなし枝」の和歌贈答へと展開してゆく『和泉式部日記』の冒頭に
ついて、藤岡論文は「発端の数行こそ主人公の置かれた具体的な立
場が分りにくい、読者はわずかな数行を読みすすむことによって、
それらをおのずと了解できるような仕組みになっている」と述べつ
つも、それが成立するためには「読者のかわに予備的知識のあるこ
とがもとめられる」と言う。そして、「和泉式部日記に登場する人物
たちや人間関係についての顕著な特徴が、あまりにも諸書に伝来さ
れているそれと重なり合いすぎている」ことに着目した同論文は、
「予備的知識」の存在を推定する資料として『栄花物語』『大鏡』中
の為尊・敦道両親王に関わる記事を参照し、次のように述べる。

とにかく、これらの事例に共通してみられるように、世間周知
の知識（噂話）を前提にして成り立つと考えられる部分が多く、
しかもそれらは虚構的な仕組みがはかられた上で語られている。
ここにこそこの日記の特質をみとめるべきではないかとい
うことを述べたいのである。

かつて藤岡は、前掲「はつはな」巻の記事について「おそらくは
和泉式部日記に取材することによって成った部分」「和泉式部日記か
らのいわば受け売りであろう」と述べ、『和泉式部日記』から『栄花
物語』への直接かつ一方的な影響関係を認めていた。しかしここで
は、そうした直接の影響関係は可能性として考慮されながらも、前
面に押し出されることはない。あくまで両作品に共通する『前提的

基層」として、和泉式部と為尊・敦道両親王の周縁で巻き起こった
出来事についての情報を、当時の人々が噂として共有していたこと
を推定するのである。例えば『栄花物語』『大鏡』にみられる次の記
事は、『和泉式部日記』に拠ることなく和泉式部と帥宮との様子を描
いている点で、『前提的基層』の存在を強く看取させるものといえ
う。

今年はこの使のひびきにて、帥宮、花山院など、わざと御車し
たてて物を御覧じ、御棧敷の前あまたたび渡らせたまふ。帥宮
の御車の後には、和泉を乗せさせたまへり。

（『栄花物語』巻第八「はつはな」②・三七一頁）
この春宮の御弟の宮達は、少し軽々にぞおはしまし。帥宮の、
祭りのかへさ、和泉式部の君とあひ乗らせたまで御覧せしさま
も、いと興ありきやな。御車の口の簾を中より切らせたまひて、
わが御方をば高う上げさせたまひ、式部が乗りたる方をば下ろ
して、衣ながう出ださせて、紅の袴に赤き色紙の物慰いとひろ
きつけて、地とひとしう下げられたりしかば、いかにぞ、物見
よりは、それをこそ人見るめりしか。

（『大鏡』地・兼家／二四七～八頁）
こうした記事の背景にある『前提的基層』の一つには、為尊・敦
道両親王に対する「二親王一体視」とも言うべき意識があったと藤
岡論文はいう。同論文では両親王が一对に描かれている記事が列挙
されており、たとえば『大鏡』では、右記事に「この春宮の御弟の
宮達は、少し軽々にぞおはしまし」とあるように両親王がともに
「少し軽々」な性格であったことが繰り返し語られ、また『栄花物語』

によれば両者は同時に元服したことになる。後者は史実に反する記述だが、実際の性格はどうあれ、その行動から些か輕佻にもみられかねなかった二人の若い親王を、世の人々がいわば一對の主人公のように捉え、好んで噂話の話題に上せたであろうことが、こうした記事から窺えるのである。

さらに、この両親王についての噂をも上回る最大の『前提的基層』としてあったのが、『和泉式部をめぐる多彩多情な男性関係の噂に他ならぬ』と藤岡論文はいう。和泉式部が多情の噂に悩んでいたことは『和泉式部集』中の歌や詞書に語られており、また『和泉式部日記』においても、女と帥宮とが互いに相手に関する世上の噂を意識している描写は数多い。その延長線上に、多情な女歌人和泉式部と若く輕佻な為尊・敦道両親王との恋愛関係、およびその周辺事情についての噂が発生したことは想像に難くない。このような観点から『栄花物語』「はつはな」巻の記事を眺めたとき、おそらく当時の人々は北の方退去の経緯についても何らかの情報を共有しており、それが『栄花物語』『和泉式部日記』の『前提的基層』として存在したとの推測が可能になる。和泉式部と帥宮との恋愛はそれ自体がセンセーショナルであり、それがどのように北の方の帥宮邸退去と関係したのかについて、人々は真実を知ることなくとも、噂として幾つかの「事実」を耳にしたはずである。

『和泉式部日記』の跋文は、まさにこのような『前提的基層』の上に書かれ、読まれたのではないだろうか。なるほど、『栄花物語』「はつはな」巻の記事が語るのは、北の方退去に際しての東宮女御の傍觀的な姿勢のみである。だがその裏には、北の方が東宮女御に苦衷

を訴えるも素気なく却下されたという「事実」があったかもしれない。そうした噂を人々が共有していたと考えられることもできるのである。

ここにいる人々とは、『和泉式部日記』の読者だけでなく跋文の筆者をも指す。「宮のうへ御ふみかき・女御との御ことは、さしもあらし、かきなしなめり」との跋文を書き付けたこの筆者は、北の方と東宮女御とのやり取りに関する、よりもつともらしい情報を読者共々把握しており、ゆえにそれとは相違する内容で書かれた作中の手紙について「意図的な書き変えであろう」と述べたのではない。そして読者も、作品の終末部で北の方への好意的な描写が続いた後に置かれるこの跋文を目にし、自らが伝え聞いた噂の信憑性を再確認したのと考えられよう。

つまりこの跋文の筆者が、北の方と東宮女御との間に冷淡な底酬があったという世間の噂を自ら聞き知った上で、「読者の皆様もご存知の通り」と、言うなれば読者へのサービスとして皮肉的に書き付けたのが「かきなしなめり」だった——このような読解の可能性が、「かきなし」の正しい語義理解によって導かれるのである。

五 おわりに

以上本稿では、『和泉式部日記』跋文の「かきなし」に「創作」という語義が認められないことを用例の検証から確認し、これを「意図的な書き変え」と解釈すべきことを提示した上で、同跋文が、作中の北の方と東宮女御との手紙の内容が世上の噂とは異なっていることへの断りとして書かれ、また読まれたものであることを、『栄花

物語」と『和泉式部日記』とに共通する「前提的基層」との関わりから説明した。

これまで『和泉式部日記』の跋文については、北の方に対する配慮から実在しない（好意的な）手紙のやり取りを創作してしまったことへの、和泉式部自身による弁解の辞、という理解が多くなされてきた。前掲の大倉論文のほかに、⁽¹⁴⁾『考注』の考説欄をはじめ、伊藤博『和泉式部日記』の成立・日記と物語とのあわい⁽¹⁵⁾、松島毅『和泉式部日記』終末部の記事をめぐって⁽¹⁶⁾、呉羽長『和泉式部日記』における「作者のことば」⁽¹⁷⁾と、「配慮」への理解は様々なながら、この跋文を和泉式部の弁解とみる点で一致している。だがそもそも、そのような弁解の辞を跋文として書き付ける行為自体が、北の方への配慮を無下にしてしまうことを思えば、右のような従来の理解は疑わしいのである。無論、こうした理解は「かきなし」を作者の空想による「創作」と解する所から発した誤りであって、これを現実の出来事に基づく「意図的な書き換え」と正しく解した上で、本稿で示したった「前提的基層」との関係を検討することにより、蓋然性の高い解釈が得られるのである。

さらに別の見方としては、北の方への配慮を揶揄する第三者の言として、この跋文を読むことも許されようし、また作品全体を第三者の作とみる場合にはこの限りではない。あるいは、跋文を含めてやはり和泉式部自身の作とみるならば、清水好子「和泉式部日記の基調」⁽¹⁸⁾の「歌のなかの身を投げ出すような誘惑者としての式部とは別な、北の方に、大きくは世間に向かって頭を擡げて立つ式部が、日記の文章からは浮かび上がってくる」との見方、つまり和泉式部

の北の方に対する皮肉混じりの勝利宣言として読み取る見方もまた可能となるかもしれない。

先述の理由からこれ以上深入りしないが、こうした問題についても本稿の結果を踏まえて再考してゆくことができようし、求められることにもなるう。

注

(1) 『和泉式部日記』の本文は藤岡忠美編『宮内庁書陵部蔵伝三条

西実隆筆 和泉式部日記』（和泉書院、一九八三）による。なお掲出にあたり私に句読点を施した。

(2) 本稿で引用ないし言及する『和泉式部日記』諸注とその略称は以下の通り。

竹野長次「校定和泉式部日記新釋」（精文館書店、一九三〇）

↓「校定新釋」、小室由三・田中栄三郎「和泉式部日記詳解」

（白帝社、一九三七）↓「詳解」、五十嵐力「昭和完譯和泉式部

日記」（白鳳出版社、一九四七）↓「昭和完譯」、玉井幸助「和

泉式部日記新註」（世界社、一九四九）↓「新註」、尾崎知光「和

泉式部日記考注」（文京書院、一九五四）↓「考注」、遠藤嘉基

『日本古典文学大系 和泉式部日記』（岩波書店、一九五七）↓

『大系』、山岸徳平『日本古典全書 和泉式部日記』（朝日新聞

社、一九五九）↓「全書」、円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部

日記』（至文堂、一九六五）↓「全講」、藤岡忠美『日本古典文

学全集 和泉式部日記』（小学館、一九七二）↓「全集」、狩野尾

義衛『対校和泉式部日記新釈』（白帝社、一九七三）↓『対校新釈』、清水文雄『鑑賞日本古典文学 和泉式部日記』（角川書店、一九七五）↓『鑑賞』、川瀬一馬『講談社文庫 和泉式部日記』（講談社、一九七七）↓『講談社文庫』、小松登美『講談社学術文庫 和泉式部日記 上中下』（講談社、一九八〇～五）↓『学術文庫』、野村精一『新潮日本古典集成 和泉式部日記』（新潮社、一九八一）↓『集成』、今井卓爾『和泉式部日記 譯注と評論』（早稲田大学出版部、一九八六）↓『譯注と評論』、三田村雅子『日本の文学 古典編 和泉式部日記』（はるぶ出版、一九八七）↓『日本の文学』、由良琢郎『和泉式部日記全釈』（明治書院、一九九四）↓『全釈』、藤岡忠美『新編日本古典文学全集 和泉式部日記』（小学館、一九九四）↓『新全集』、中嶋尚『和泉式部日記全注釈』（笠間書院、二〇〇二）↓『全注釈』、近藤みゆき『角川ソフィア文庫 和泉式部日記』（角川書店、二〇〇三）↓『ソフィア文庫』。

（3）『新註』より前の注釈書では群書類従本が底本とされているために些か事情が異なる。群書類従本では本文、

宮のうへ御文かき。女御殿の御ことはさしも。あら／＼かきなしなめり。

となつており、これを元に「宮の奥方の御手紙の書きさまや、女御殿からの御手紙の言葉つきなどは、記者の想像で、おほよそに拵へて書いたやうだ」（『校定新釋』通釋）・「宮の北の方のお手紙や、女御様のお言葉は、至極大ざつばに書き載せたのであらう」（『詳解』通解）・「宮の北の方と女御殿との事

は、作者が推量して書いたもので、北の方の御手紙、女御殿の御言葉の調子なども、精しい写真ではなく、不文なる女がまはらぬ筆の、ほんのざつと書きであらう」（『昭和完譯』評釋）等の解釈が示されている。

（4）散文作品の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、作品名・分冊番号・頁数を示した。和歌作品の引用は『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川学芸出版）により、歌集名・巻数・歌番号を示した。ただし他の文献による場合は随時引用元を明記した。傍線等は筆者による。

（5）森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望 第六輯』（三弥井書店、二〇〇九）所収。

（6）傍線部の近辺、底本の宮内庁書陵部蔵桂宮本では「ある人かしうになし」と文意不通だが、これを誤写とみて大系のように改めるのが通説。なお新全集は同箇所「あるべかしう書き」とする。

（7）ただし注（3）に示した群書類従本のように、系統によつて若干の異同がみられる。寛元本系統の写本では「御ことは」が「御事は」とあり、この場合東宮女御の手紙だけでなく、女御方からの関わり合いという事実全体を指しているとも考えられる。また混成本系統の写本は末尾の「と本に」を欠くが、これは諸本校合の際に削られたとみるのが一般的。

（8）『和泉式部日記』はいかに擲筆されたか（『解釈』四九巻一・一・一二号、二〇〇三・一一）。

（9）『平安文学研究』四八号、一九七二・六。

- (10) 『語文研究』 六八号、一九八九・一二。
- (11) 『国文学攷』 一三二号、一九九一・九／『王朝和歌・日記文学試論』 新典社、二〇〇三。
- (12) 『国語と国文学』 六四卷二一号、一九八七・一一。
- (13) 「和泉式部伝の修正——為尊親王をめぐる——」(『文学』 四四卷一一号、一九七六・一一)。
- (14) 和歌文学会編『和歌文学の世界 第十二集 論集和泉式部』 笠間書院、一九八八／『和泉式部日記研究』 笠間書院、一九九四。
- (15) 『国文学 解釈と鑑賞』 三五卷一二号、一九九〇・一〇／『和泉式部日記研究』 笠間書院、一九九四。
- (16) 『中古文学論攷』 一五号、一九九四・一二。
- (17) 『富山大学教育学部紀要(文科系)』 四九号、一九九七・二。
- (18) 『国文学(関西大学)』 五四号、一九七七・九。

(おくだ たかのり・北海道大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)